

Japanse vereniging voor de studie van België

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

Association japonaise
d'études belges

第4号

2016年2月

Japanische Vereinigung
für Belgische Studien



ベルギー研究会

Japanse vereniging voor de studie van België
Association japonaise d'études belges
Japanische Vereinigung für Belgische Studien

目 次

- 日白修好 150 周年記念シンポジウムについて
 - シンポジウム概要
 - 主催者よりご挨拶
 - シンポジウム実行委員会を立ち上げました。
 - キックオフ会開催のご報告
- 研究会の記録
- コラム
- 研究会会員一覧
- 刊行物の紹介
- 今後の予定

日白修好 150 周年記念シンポジウムについて

1866年8月1日（慶応2年6月21日）、日本はベルギーと修好通商航海条約を締結しました。これは日本が幕末に西洋諸国と結んだ9番目の条約でした。その後、一時期の不幸な期間を除いて、両国は常に良好な関係を保ち、文化的・経済的な人的交流が続けられてきました。そして、今年2016（平成28）年、めでたく修好150周年を迎えます。



そこで、この記念すべき日白修好150周年の年に、日本とベルギー両国間の分野を超えた人的交流を促進し、両国間の相互理解のさらなる深化、「ベルギー学」の構築による日本におけるベルギー理解のさらなる向上に寄与することを目指して2016年12月に国際シンポジウムを開催いたします。

シンポジウム概要

日白修好 150 周年記念シンポジウム 「文化・知の多層性と越境性へのまなざし —学際的交流と「ベルギー学」の構築をめざして—

- 日 程：2016年12月9日（金）～11日（日）
会 場：東京理科大学、在日ベルギー王国大使館
主 催：日白修好150周年記念シンポジウム実行委員会
（問合せ先：mail@jb150sympo.org）
共 催：日本ベルギー学会、ベルギー研究会、東京理科大学
後 援：在日ベルギー王国大使館、日本・ベルギー協会、フランダースセンター、
ベルギー観光局ワロン・ブリュッセル、ワロン地域政府 貿易・外国投資振興庁
（順次申請中）
内 容：①2016年12月9日（金）午後 演奏会
レセプション
②2016年12月10日（土）午後 基調講演
分科会
懇親会
③2016年12月11日（日）終日 分科会
パネルディスカッション

参加方法：①招待制、②&③事前申込制

※参加申込は、2016年6月以降、シンポジウムウェブサイト専用フォームより受付開始の予定です。

Website：www.jb150sympo.org

分科会での発表申込を受付中

シンポジウムではプログラム2日目、3日目に実施する分科会での発表を募集しています。

募集期間：2015年11月1日-2016年3月31日

申込方法：シンポジウムウェブサイト内の「申込フォーム」よりお申し込み下さい。
お名前・E-mail・ご所属・発表タイトル・要旨（400字程度）・分野をお知らせ下さい。

※締め切り後、実行委員会で審査を行い、結果をご連絡いたします。

※ご発表いただく方には、追ってご発表いただく分科会、シンポジウム当日までの準備スケジュール（発表時間、予稿集執筆要項等）について別途ご連絡差し上げます。

主催者よりご挨拶

ベルギーと日本との間では、学術、藝術、技術、産業などすべての分野において極めて親密な人的交流が行われてきた。一つには、ベルギーの特質として、多様な言語、文化を内部に含み、多層的で柔軟な文化的雰囲気を持ち、一方で伝統文化を持ちながら柔軟に世界の文化を吸収してきた日本と相通じるところがある。そこには、巨大なるもの、強固なるものよりも、小柄で柔軟なものへのまなざしがある、そして賢く生きてきた庶民の生活がある。大きな潮流よりも、身の丈に応じた独創的営みを創出し、それが静かに浸透していくものをつくりだしてきた。このシンポジウムでは、ベルギーの文化の多層性を、ベルギーの「タペストリー」に見るように、細部にいきわたる独自性の中に見だし、両国の文化がなぜ引き合うのかを明らかにしたい。こうして日本における「ベルギー学」を創出する機会としたい。

北原 和夫 東京理科大学教授・東京工業大学名誉教授・国際基督教大学名誉教授
日本ベルギー学会会長

ベルギーは、多言語・多文化状況やマイノリティへの関心が増大してきた世界において、これらの価値観や異文化理解にとっての、具体的かつ明確なイメージと展望をもたらしてくれる事例になり得ます。移民、民族紛争、宗教的差別など多くの問題を抱える現代世界にとって、ベルギーの文化・芸術・技術の多様性やそれらの前衛性から多くを学べるはずで、また多層性、越境性という風土において外交や調停能力も育まれました。ベルギーにおける「日本学」のレベルの高さにも注目すべきで、多方向からの視点で日本を見つめ直すこともできるでしょう。

今回のシンポジウムでは、これまでの研究の蓄積もふまえた、ベルギーに関わる諸分野の最新研究・情報を一堂に集めて発表・議論をする場を提供し、またベルギーからも各分野及び日本学、日白交流の専門家を招聘し講演をしていただきます。各分野の研究動向を知り、また分野を超えてのベルギー研究の意味を探り、さらに一般の参加者の方々にもベルギーの文化や学術研究の奥深さや意義を知ってもらい、日白の交流を一層深めていきたい、などといった様々な期待を抱いております。そして新たな「ベルギー学」の構築に向けての第一歩にしたいと思います。多くの方々のご発表、ご参加をお待ちしています。

岩本 和子 神戸大学教授
ベルギー研究会会長

シンポジウム実行委員会を立ち上げました。

シンポジウム開催に向け、本研究会は日本ベルギー学会と連携し、2015年7月に以下のメンバーで日白修好150周年記念シンポジウム実行委員会を立ち上げました。

代 表 北原 和夫（東京理科大学、日本ベルギー学会会長）
委 員 長 石部 尚登（日本大学、ベルギー研究会副会長）
副委員長 岩本 和子（神戸大学、ベルギー研究会会長）
委 員 武居 一正（福岡大学、日本ベルギー学会副会長）
三田 順（北里大学、ベルギー研究会副会長）
井内 千紗（東京文化財研究所）
今中 舞衣子（大阪産業大学）
大久保 信行（中央大学）
小林 亜美（京都女子大学）
吹田 映子（筑波大学）
鈴木 義孝（関西大学）
津田 由美子（関西大学）
中條 健志（大阪市立大学）

キックオフ会開催のご報告

2016年1月8日、ベルギー大使館にて「日本とベルギーの文化交流のさらなるヒューマン・ネットワーク構築のキックオフ」と題し、会合を開きました。当日は約80名の方が参加し、シンポジウムの趣旨を知っていただくと同時に、様々な分野でベルギーに関わってこられた方々の交流の場となりました。会合開催にあたり、企画調整を主導して下さった北原先生と在日ベルギー大使館の皆様にご場を借りて御礼申し上げます。

プログラム

「2016年を迎えて」北原和夫（東京理科大学）
「ベルギーの文学」岩本和子（神戸大学）
「ベルギーの科学技術」大久保信行（中央大学）
「ベルギーの美術・工芸」吹田映子（筑波大学）
「芸術交流史からみたベルギーと日本」高木陽子（文化学園大学）
「シンポジウムの構想」石部尚登（日本大学）
「2016年の取り組み」クリストフ・ドバッソンピエール（在日ベルギー大使館）
レセプション

シンポジウムの詳細は今後以下のウェブサイトですぐ更新してまいります。

www.jb150sympo.org

研究会の記録

2015年1月から2016年2月にかけて、神戸、大阪、東京、福岡、ブリュッセルにて、計6回研究会を開催いたしました。

第58回研究会

日時: 2015年2月22日(日)13:30-17:30

会場: 神戸大学国際文化学研究所 E棟3階 E325

【発表1】「メーテルランク『青い鳥』に関する言説についての一考察」内田智秀（名城大学）

【発表2】「ワロニーにおける象徴主義受容と〈北方〉アイデンティティの形成」三田順（北里大学）

【映像鑑賞】『パトラッシュ、フランダースの犬』(2008)

発表要旨

「メーテルランク『青い鳥』に関する言説についての一考察」

内田智秀

1908年9月30日、モーリス・メーテルランクの『青い鳥』は、スタニスラフスキーの演出によりモスクワで上演された。セルジュ・バッセが「フィガロ」紙において、モスクワでの熱狂ぶりを伝えているように、『青い鳥』はロンドン、ニューヨーク、そしてパリでも上演され、成功を収めた。観客や読者の関心が集まる一方、『青い鳥』には、さまざまな流説が飛んでいる。その流説の一つに『青い鳥』の源泉に関する記述がある。

まず、『青い鳥』の源泉を民話とするイギリスの演出家、ハーバード・トレンチによる記述がある。トレンチは、青い鳥がフランス、ロレーヌ地方の民話に古くから伝わる象徴で、幸福を意味すると述べている。また、『青い鳥』の源泉をイギリスの作家 J. M. バリーの『ピーター・パン』とするアーチボルト・ヘンダーソンによる記述がある。さらに、内縁の妻だったジョルジュット・ルブランによる『青い鳥』の証言が残されている。『青い鳥』の源泉についての分析は、これまでほぼ行われていなかった。本発表は、『青い鳥』の源泉に関するこの三つの記述を取り上げ、検討する。

また、メーテルランクが、いかなる過程を経て青い鳥を生み出したかを、手帳に記された『青い鳥』の構想をもとに明らかにする予定である。

「ワロニーにおける象徴主義受容と〈北方〉アイデンティティの形成」

三田順

本発表では、ワロニーにおける象徴主義の受容に注目し、19世紀末の当地においてフランス由来の象徴主義がまずどのように受容され、以後ブリュッセルが中心となった「ベルギー象徴派」にどのような影響力を有したのかを考察する。

象徴主義をベルギーに最初にもたらしたアルベール・モッケル(Albert Mockel, 1866-1945)は、世紀末のベルギー・フランス語文壇で活躍した数少ないワロニー人であると共に、文学における「ワロニー地域主義」の先駆者でもあった。彼が主催した文芸誌『ワロニー-La Wallonie』は、ベルギーにおける象徴主義シーンをリードした雑誌であったが、その誌名が示す通り、特に初期は地域主義的な性格を強く押し出しており、象徴主義はベルギーにおいて初めワロニー地域主義と密接に繋がっていた。ベルギーにおける象徴主義シーンの中心はまもなくブリュッセルへと移り、ヴラーンデレン文化の醸し出す「北方」のエグゾティスムを巧みに利用したヴラーンデレン系フランス語作家たちによってベルギー象徴派は国際的な成功を収めるに至るが、本発表ではこの「北方性」と結びついたベルギー独自の美学が、ワロニーで形成されていたことを指摘する。

第59回研究会

日時: 2015年3月4日(水)13:30-18:30

会場: 神戸大学ブリュッセルオフィス

共催: 神戸大学国際文化学研究科 国際文化学研究推進センター

後援: 神戸大学国際文化学部・研究科<EU文化研修プログラム>、日本ベルギー学会、現代フランス語圏研究会

【発表1】「ベルギーにおける言語規範の輸入と輸出」石部尚登（日本大学）

【発表2】「19世紀末ベルギーにおけるフュミストリーについて—Les Fumistes Wallons にみるアルベル・モッケルのフュミストリー—」岡本夢子（京都大学）

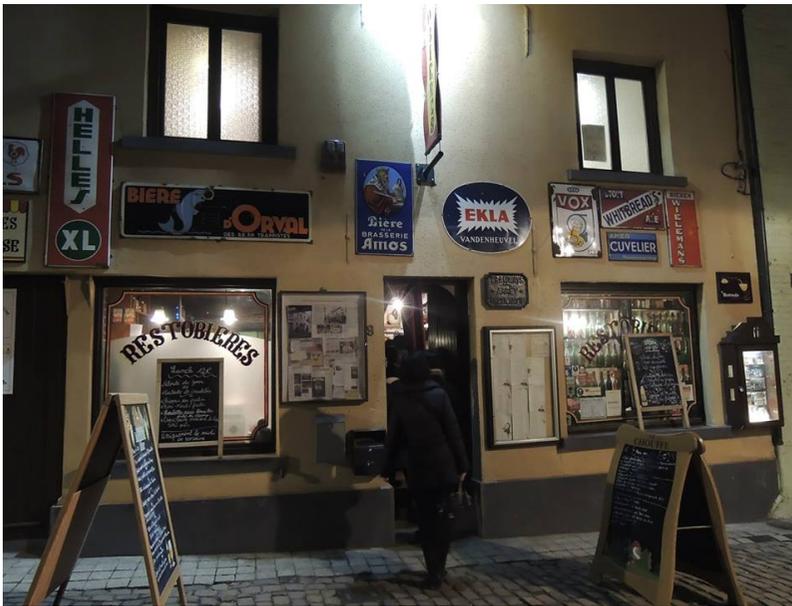
【発表3】「ベルギーにおける「移民問題」の歴史」中條健志（大阪市立大学）

【発表4】「第二次世界大戦後のベルギーにおけるルネ・マグリットと公共事業の関係—パレ・デ・コングレにおけるマグリットの壁画《神秘のバリケード》の分析から—」利根川由奈（京都大学）

【発表5】「大森荘蔵の物と心の理解について」Pierre Bonneels（ブリュッセル自由大学<ULB>）

【発表6】「ウィーンにおけるベルギー象徴派受容—シュテファン・ツヴァイクを例として—」*La Réception du symbolisme belge à Vienne. Le Cas de Stefan Zweig* 三田順（北里大学）

【特別講演】François-Auguste Gevaert (1828-1908): His Life and His Work *Le Capitaine Henriot* 大迫知佳子（京都大学）



発表要旨

ベルギーにおける言語規範の輸入と輸出

石部尚登

ベルギーの公用語はいずれも隣国の国名を冠した言語であり、言語的には「中心」を領土の外にもつ「周辺」と位置づけられる。ただし、その関係は、単に中心から言語を「借りる」だけの静的な関係というわけではない。ベルギーのフランス語圏がフランス語の規範化に多大な貢献をしてきたことが報告されている。いわば、言語的周辺から中心の規範の「輸出」の指摘である。本報告では、言語的な中心と周辺の関係は、さらにそうした「輸出」にくわえて、逆方向の「輸入」の形態や、協働を介した「合併」の形態も存在する相互作用的なものであることを論じ、かつオランダ語圏においても、そうした言語的中心／周辺の関係が一それぞれの力点は異なりつつも一同様に観察されることを示す。

19世紀末ベルギーにおけるフュミストリーについて—*Les Fumistes Wallons*にみるアルベール・モッケルのフュミストリー—

岡本夢子

1881年から1897年までモンマルトルに実在した芸術キャバレーLe Chat Noirの存在とその周辺で流行したフュミストリーという批判精神は、同時期のベルギー文芸雑誌*La Jeune Belgique*、*L'Art Moderne*、*La Basoche*などにも浸透していた。フュミストリーとは新たな芸術を目指した若者たちが既存の芸術を打開するために用いた批判的ユーモアである。今回は1886年から1892年までリエージュを中心にベルギー象徴主義に重要な役割を果たした雑誌*La Wallonie*の創始者アルベール・モッケルの、雑誌創刊までを描いた*Les Fumistes Wallons*(1887)を中心に、ベルギー世紀末文学におけるフュミストリーについて論じる。

ベルギーにおける「移民問題」の歴史

中條健志

本発表の目的は、19世紀前半から今日までのベルギーの移民史を概観しながら、移民政策および移民をめぐる政治談話がどのように変化してきたのかを分析することで、ベルギーにおける「移民問題」の変遷を明らかにすることである。ここではまず、社会的背景および移民の出身地域をもとに時代区分を設定し、各時代の移民政策の特徴を指摘する。次に、社会問題としての移民にかんする政治家の発言を取り上げ、それらが移民政策とどのようにリンクしているのかを検討する。最後に、ベルギーにおいて「移民」が語られるなかで、これまでに何が「問題」とみなされてきたのかを、近隣諸国（フランス、ルクセンブルク）との比較から考察する。

第二次世界大戦後のベルギーにおけるルネ・マグリットと公共事業の関係—パレ・デ・コングレにおけるマグリットの壁画《神秘のバリケード》の分析から—

利根川由奈

本発表では、第二次世界大戦後のベルギーにおけるルネ・マグリットとベルギーの公共事業の関係について考察し、マグリットが1950年以降多くの公共施設の壁画制作を行った理由を、文化政策と作家の意図の両面から明らかにすることを目的とする。その参照項とするのは、ブリュッセルでの万国博覧会（1958年）に際して建設された王立施設パレ・デ・コングレにおいてマグリットが手掛けた壁画《神秘のバリケード》（1961年）である。

はじめに、第二次世界大戦後のベルギーの文化政策においてマグリットが頻繁に登用されていた背景について検討する。マグリットは1948年以降、タブロー販売の拠点をアメリカに移すが、マグリットのアメリカ進出は、当時アメリカに置かれていたベルギー政府の下部機関であるベルギー政府インフォメーションセンターと、アメリカ・ベルギー美術協会によって先導されていた可能性がこれまでの研究によって明らかになった。ベルギー政府の対外文化政策に1940年代からマグリットが登用されたことに鑑みると、50年代においても政府の方針が変わっていなかった可能性が浮かび上がる。

次に、マグリットの壁画制作に対する意図を検討する。マグリットは壁画について装飾の一部だと考えていたため嫌っていた。それにもかかわらず彼が王立施設の壁画制作を請け負ったのは、彼がこれらの壁画を「絵画」と見なしていたからであった。壁画はその部屋の使用目的に合ったモチーフが使用されるのが常であるにもかかわらず、彼はどの壁画でも自身の絵画のモチーフを利用していることから、装飾としてではなく絵画を壁に描こうとした画家の意図が垣間見えるだろう。

上記の検討を経ることで、マグリットと公共事業の関係の一端を明らかにすることができると考える。

大森荘蔵の物と心の理解について

Pierre Bonneels

本発表の目的は、以下の二点である。一つ目は、大森荘蔵の生涯や哲学を紹介することである。二つ目は、大森の考察を語るために、彼の著書『物と心』において「科学の地形、と哲学」を内蔵している概念や論点を整理することである。発表ではまず、大森における「重ね描き」、「立ちあらわれ」、「はたらき」の意味を説明した上で、「哲学」や「科学」の意味を審らかにする。同時に、大森荘蔵の用いた術語に対するフランス語翻訳の妥当性について考察してゆく。これらの議論に基づき、大森荘蔵が、独自の立場に立つがゆえに、哲学や科学を分割することを明らかにしたい。

ヒズメット運動信奉者による学校建設と運営—ベルギーにおける事例

松井真之介

本発表では、トルコ出身で現在アメリカ在住のイスラーム思想家・市民運動指導者フェトフッラー・ギュレンの思想を元にした「ヒズメット（奉仕）運動」の信奉者・活動家たちによる市民運動を紹介するとともに、特にギュレンと信奉者たちが重要視する「教育」について、彼ら独自の学校建設の例を紐解きながら、その特徴と意義を検討分析する。事例としてフランス、パリ郊外にある EducActive（訪問済）、ベルギー・ブリュッセル市およびシャルルロワ市近郊にある Ecole des Etoiles（未訪問）を取り上げる。なお、本発表は翌日から行うブリュッセル市とシャルルロワ市 Ecole des Etoiles 訪問調査の準備調査に位置づけられる。

La Réception du symbolisme belge à Vienne. Le Cas de Stefan Zweig

ウィーンにおけるベルギー象徴派受容—シュテファン・ツヴァイクを例として—

三田順

世紀末のフランスで生まれた象徴主義は、隣国のベルギーでより多様な展開を見せた。フランスにおいて象徴主義文学が専ら詩の分野に留まったのに対し、ベルギーでは他ジャンル、とりわけ戯曲や散文で花開いたことが、言語を異にする諸外国においてもベルギー象徴派の作品が積極的に受容される要因の一つとなった。

本発表では、エミール・ヴェラーレンの友人であり、その作品の翻訳者でもあった作家シュテファン・ツヴァイクを例として検討し、世紀末ウィーン文壇でベルギー象徴派の何が評価され、ウィーンの作家達がフランスとベルギーの差異をどのように認識していたのかを明らかにしたい。

François-Auguste Gevaert (1828-1908): His Life and His Work *Le Capitaine Henriot*

大迫知佳子

フランソワ=オーギュスト・ヘファールト（1828-1908）は、19世紀後期に活躍したベルギー出身の音楽家です。彼は、ブリュッセル王立音楽院第2代目院長として、また、作曲家、音楽学者、教育者として、ベルギーの音楽文化発展に貢献しました。本発表（講演）は、翌3月5日にブリュッセル王立音楽院で上演されるヘファールトのオペラ・コミック《キャピテン・アンリオ》の前触れであり、ヘファールトの生涯、オラ・コミックの登場人物、あらずじ、そしてこの作品への19世紀における批評、に焦点を当ててお話しします。

第60回研究会

日時: 2015年5月17日(日)14:00-18:00

会場: 大阪産業大学梅田サテライトキャンパス

【報告および告知】「国際フランス語教授連合 (FIPF) 役員研修およびリエージュ世界大会について」

今中舞衣子 (大阪産業大学)

【発表】「エチエンヌ・ド・グレーフによる「殺人犯の心理」—ヘール、犯罪学の分岐点—」梅澤礼 (立命館大学)

【アトリエ】「教育実践を共有する・ふりかえる」ファシリテーター: 今中舞衣子 (大阪産業大学)

第61回研究会

日時: 2015年7月26日(日)13:00-18:00

会場: 明治大学 研究棟4F 第三会議室

【発表1】「« québécois » および « québécoisité » からみるケベック文学の特徴—ベルギー文学との比較研究の可能性を探る」佐々木菜緒 (明治大学)

【発表2】「詩人ギ・ゴフエットを読む」白石幸作 (明治大学)

【発表3】「ベルギーにおける幻想の系譜とフランス・エレンス」三田順 (北里大学)

【発表4】「留学経験者のライフ ヒストリーからみるベルギー社会」山口博史 (都留文科大学)

【発表5】「ブリュッセルにおけるオランダ語文化振興について」井内千紗 (東京文化財研究所)

発表要旨

« québécois » および « québécoisité » からみるケベック文学の特徴—ベルギー文学との比較研究の可能性を探る

佐々木菜緒

本発表の目的は、20世紀半ば頃に生まれたケベック文学の特徴を考察することにある。ベルギー文学研究においてベルギーという呼称やベルギー性に関する議論が盛んであることから着想を得て、「ケベックの québécois」或いは「ケベック性 québécoisité」という用語の意味を追いながら考察する。その際、上記2つの用語を1960年代以降のケベックにおける一連の社会変革と結びつけたイデオロギー概念として示すことに本発表の焦点はあてられる。

詩人ギ・ゴフエットを読む

白石幸作

ギ・ゴフエット Guy Goffette は、ベルギー出身の詩人、作家である。生まれたのは1947年で、未だ詩人、作家としての途上にあり、今後も精力的な創作活動が期待される。ゴフエットの詩あるいは小説が翻訳、紹介された形跡はほとんどなく、日本でゴフエットについての発表が行われるのは今回が初めてと言えるかもしれない。本発表では小説は扱わず、どんな詩人なのかという紹介を主目的とするが、いくつかの詩作品を読むことで、何の先入観も持たずにゴフエットの詩世界に迫ってみたい。

ベルギーにおける幻想の系譜とフランス・エレンス

三田順

1937年、エレンスも属した「月曜会」は、文学における地域性からの脱却を宣言し、ベルギー・フランス語文学はフランスを中心とする「向心的段階」へと転換する。この経緯からエレンスは「ベルギー的」文学の伝統に否定的であったと見なされるが、その幻想的文学を特徴付ける美学は、ベルギー文学の本質的要素でもある。本発表では、ベルギー文化における「幻想」の系譜を概観し、エレンスと「ベルギー性」の関連について現段階での知見を報告する。

留学経験者のライフヒストリーからみるベルギー社会

山口博史

本研究会では周知のように、ブリュッセル周辺地域は蘭仏語話者の混住地域だが、制度的にはオランダ語圏である。この報告では同地域に住む、あるベルギー人のライフヒストリーをとりあげる。今回とりあげる人物は、言語に焦点化しない地域的市民運動の当事者で、欧州外への留学経験や仕事の関係で移動を少なからず経験していることが特徴である。この報告では、これまで行なってきたライフヒストリー・インタビューとの比較も交えつつ、多言語地域に居住する人の「移動」経験がどのような語りを生み出すかについて考えてみたい。

ブリュッセルにおけるオランダ語文化振興について

井内千紗

ブリュッセルにおけるオランダ語文化は、フランス語文化に対してマイノリティ的立場にあるという観点の議論が従来主流であったが、21世紀以降、「オランダ語化」あるいは「フランデレン化」とも呼べる現象が観察されている。これはフランデレン政府による政策の効果という枠のみでは捉えられず、ブリュッセルにおける土着性を有する文化の歴史的発展の過程に位置づけることができる。本発表では、事例として1980年代以降に起こった現代舞台芸術の歴史的展開を取り上げ、政策と文化活動の相互作用について概説する。

第62回研究会

日時: 2015年12月19日(土)13:00-17:00

会場: 福岡大学

【発表1】「第6次憲法改正について」 武居一正(福岡大学)

【発表2】「手帳」のなかの『ペレアスとメリザンド』 内田智秀(名城大学)

【発表3】「エクトール・シェネーと〈ものの魂〉」 三田順(北里大学)

【発表4】「ギ・ゴフェットの詩集『約束された生 *La Vie promise*』について」 白石幸作(明治大学)

※研究会翌日は武居先生のご案内で柳川を観光しました。



発表要旨

「手帳」のなかの『ペレアスとメリザンド』

内田智秀

モーリス・メーテルランクが愛用していた「日付入り手帳」(以下「手帳」)には、『ペレアスとメリザンド』(1892年出版、1893年初演)の構想メモが記されている。構想メモには、作品プランや人物名、各場面の台詞が断片的に書き付けられている。その中でも、最終稿第四幕第四場と第五幕第二場にあたる場面の構想は同じ主題で、同じ台詞が繰り返し現われており、両場面に対するメーテルランクの関心の高さがうかがえる。

最終稿ではこれら二場面により、ペレアスとメリザンド、そして彼女の夫であるゴローとの三者の関係が明らかにされるため、先行研究ではこの両場面でのメリザンドの台詞に注目が集まることが多い。しかし、「手帳」のなかのメリザンドは最終稿で描かれるメリザンドとは異なる。本発表は、メーテルランクの「手帳」や構想メモについて概説し、構想メモに記されたペレアスとメリザンドの告白の場面と物語の結末を中心に現段階での成果を報告する。

エクトール・シェネーと〈ものの魂〉

三田順

本発表では、ワロニー出身の象徴主義作家、エクトール・シェネーの散文作品『ものの魂 *L'âme des choses*』(1890)の分析を行う。「ものの魂」という表現はベルギー象徴主義絵画に頻出し、「ベルギー的」象徴主義美学の代名詞のように使用されるが、その最初期の使用例がシェネーの表題作であることは殆ど知られていない。本論では、テキストを中心に考察を進め、シェネーが文芸批評で語っている「ワロニー的」美学との関連を探る。

ギ・ゴフェットの詩集『約束された生 *La Vie promise*』について

白石幸作

前回のベルギー研究会で、ベルギー出身の詩人ギ・ゴフェット Guy Goffette(1947-)について簡単な紹介をしながら、数篇の詩作品の翻訳を試みた。今回も引き続きゴフェットを扱いたいと思う。日本では未知の詩人(作家)ではあるものの、フランスではすでにゴフェットに関する論考はいくつか存在している。それらを参照しながら、まずはゴフェットという詩人の特に生涯について確認できることがどれだけあるのかを踏まえておきたい。発表者がゴフェットを読むうえで中心に置いているのは、*Eloge pour une cuisine de province*(1988)、*La Vie promise*(1991)という二冊の詩集である。今回は、*La Vie promise*(ひとまず『約束された生』と訳す)を主な考察対象とする。先行論文を紹介しつつ、『約束された生』で展開される詩世界に迫りたい。なお、上記の二冊の詩集の中から、今回もいくつかの詩を新たに訳出し配布したいと考えている。

第63回研究会

ケベック学会西日本地区第1回研究会と共催

日時: 2016年2月13日(土)13:00-17:00

会場: 阪南大学あべのハルカスキャンパス

テーマ: 多言語社会ケベックとベルギー—その言語状況と舞台芸術

第1部「ケベックとベルギーの言語状況」(司会: 岩本和子(神戸大学)、コメンテーター: 真田桂子(阪南大学))

「ケベックのアングロフォン—現状と今後の展望—」大石太郎(関西学院大学)

「ベルギーの言語としてのフランス語—ワロン運動における言語観から」石部尚登(日本大学)

第2部「ケベックとベルギーの舞台芸術」(司会: 岩本和子(神戸大学)、コメンテーター: 真田桂子(阪南大学))

「ベルギーの現代舞台芸術—教育と情報が果たす役割」高橋信良(千葉大学)

「ケベックの地域主義・文化政策・舞台芸術」藤井慎太郎(早稲田大学)

コラム

「マグリット展」がやって来た！

吹田映子（筑波大学）

2015年は日本に居ながらにしてマグリットの絵世界に浸ることのできる幸福な年であった。13年ぶりとなる個展が東京（国立新美術館：3～6月）から京都（京都市美術館：7～10月）へと、半年以上かけて巡回したからだ。日本でマグリット展は1971年、1982年、1988年、1994年、2002年と定期的に開催され、今回は6回目に当たる。ベルギー側の監修は王立美術館館長のミシェル・ドラゲが務めたが、当館の全面協力を得た企画は2002年から続く。当時の企画が、1998年に現地ブリュッセルで開催された画家の生誕百周年記念展を実績として活かしたものだだったとすれば、今回は2009年に「芸術の丘」に新設されたマグリット美術館に関連する実績を踏まえたはずの、待望の企画であった。

期待以上！タブローで130点を通史的に配した構成は、様式の変化に合わせた五つの時期区分を採用し、それぞれを丁寧に紹介する内容となっていた。マグリット美術館の展示構成がやはり通史的で、三階に跨った会場がおのずと初期、中期、後期という見取り図を提示してくれるのだが、本展の内容はそれをさらに掘り下げたかたちだ。それも王立美術館のコレクションに頼るのではなく、開催地の日本を始め、アメリカ、イギリス、イスラエル等各地の美術館や個人の所有する作品を一堂に集めたものだから、ブリュッセルのとは別の、もう一つのマグリット美術館が束の間ここ日本に出現したと言っている。

始まりは1920年から1926年までの「初期作品」。そもそも現存する作品が少ない中、多様性に富んだ出品がなされ、駆出しの画家がいかに流行の様式（構成主義やピュリスム等）を涉猟し、折衷的に採用していたかがよくわかる。他方で、出品された四点中三点が女体をモチーフにしたものであることは意味深長だが、これが〈裸婦〉を隠れたテーマとする本展の布石であることは、本展の中盤以降で明らかとなる。

前衛様式の海をひとしきり泳いだマグリットは自分に合う方向性として「シュルレアリスム」を見出し、これが1926年から1930年までのテーマとなる。ここには、得体の知れない未知の物体を、日常見慣れた既知の対象と組み合わせる描いた絵が多い。概して色調は暗く、たびたび出現する白いデスマスクのような頭部は、マグリットが思春期の頃見舞われた母親の自殺という暗い過去を連想させる。端的には不気味さが特徴と言え、実際、居合わせた少年は「こわい！」と叫んで母親にしがみついていた。だが、暗さに覆われた絵世界にも徐々に明るい色彩が、とくに空の青として入り込んでくる。例えば《色彩の変化》（1928年）で、描かれた額縁は二つの区画を提示するが、一方には白い雲を浮かべた青空らしきものが、もう一方にはただの黒い色面が見える。これも後になって分かることだが、ここには後年の《光の帝国》（1950年）に直結する思考が表現されているのだ。

画面の暗さが晴れると、先の少年も「これはこわくないね」と評価する。これが1930年から1939年までの「最初の達成」と称される時期だ。マグリットは絵の具の明るさを増すだけでなく、描くものは日常馴染みの対象に限定し、それらをこの上なくはっきりとした外観で描くようになった。とはいえ、それらは日常的な思考の枠組みを超えた、意想外の組み合わせで描かれるところに特徴があり、一言でいえば不思議さに形容される。現実にはあり得ない光景が、あっけらかんとした白昼の出来事として提示されることの衝撃力。これが「最初の達成」であるのは、その後1940年代の作風の変質を経て、マグリットが再び同様の作風に「回帰」するからだ。つまり彼の作風は、1930年代前後に安定した成熟期を迎えていたことになる。

だが、成熟は停滞でもある。アメリカの美術市場で順調に顧客を獲得しつつあった自らの画風に、マグリットは居心地の悪さを感じ始める。彼がそれを否定し、思い切った改革を断行したのは、1939年から1948年にかけての「戦時と戦後」の時期であった。かくして、輪郭のはっきりしないモヤモヤした筆触と、強烈に明るい色彩を特徴とする、印象派風の作品が認められることになる。なかでも、マグリットの気に入りだった《不思議の国のアリス》（1946年）が本邦で初公開されたことは意義深い（小型のグワッシュ版は1988年来日）。空想的なモチーフと色彩において際立つこの大型作品に、居合わせた女性も見入っていたが、長年「例外」扱いを受けてきたこの時期の作品を再評価する機運はドラゲによって高められたものだ（2006年パリのマイヨール美術館での個展）。

瞠目すべき今ひとつの点は、戦前から戦後にかけて制作され、裸婦を共通のモチーフとした六作品が並べられたことである。ここで、女体を描いた「初期」の作品群と、1930年代に同様のテーマを扱ったいくつかの作品が想起され、このモチーフの変わらぬ重要性和、マグリットがこれらに与えた表現の変化がよくわかる仕掛けとなっている。この後、1940年代はフォーヴィズム風の〈羽目外し〉で締め括られる。

その後、晩年の1967年までは「回帰」となるが、なかでも《光の帝国》は磐石だ。何人かに本展の感想を聞いたが、美術に疎いという者でさえ、印象に残った作品として真っ先に挙げるのはこれだった。晴れた青空と夜の闇に包まれた地上とを上下に組み合わせた表現は、1928年の思考の再来とも見える一方で、この間の遍歴に示された時間の厚みを内包した奥深さを感じさせもする。だが奥行きは、画面そのものには存在しない。過去の作品の単なる焼き直しに見えもする1950年代以降の作品は、その実明らかな特徴として、画面の平板さを一層顕著に印象づけるからだ。とりわけそれは大型作品において発揮され、それらを前にすると、現実世界の手前に垂直に立てられた平面と向かい合っている感覚を持つ。要するにメタ絵画なのだが、垂直に立つこの平面はいわば《墓標》のごときものだ。個人的に《ガラスの鍵》（1959年）のような作品が好きだが、すでに《前兆》（1938年）にも描かれたこの世界は、ある意味で色を感じさせない、明と暗だけのいわば無音の、死の世界であり、私はそれを見つめていつまでも立ち尽くすことができた。



刊行物の紹介

2014年から2015年にかけて出版されたベルギー関連の本や会員の近刊をご紹介します。

- ◆『ジョルジュ・ローデンバック研究』村松定史（著）、弘学社（2014/12/25）
- ◆『フランドルの四季暦』マリ ゲヴェルス（著）、宮林 寛（翻訳）、河出書房新社（2015/11/12）
- ◆『誰がネロとパトラッシュを殺すのか — 日本人が知らないフランダースの犬 —』アン・ヴァン・ディーン デレン、ディディエ・ヴォルカールト（編著）塩崎香織（訳）野坂悦子（解説）、岩波書店（2015/12/10）
- ◆『近代日本〈陳列所〉研究』三宅拓也（著）、思文閣出版（2015/3/4）

今後の予定

第64回研究会

日時: 2016年3月3日(木)13:30-18:00

会場:神戸大学ブリュッセルオフィス

「世紀末リエージュ新聞 Caprice Revue について」岡本夢子（京都大学・リエージュ大学）

「ヴィクトール・オルタとアール・ヌーヴォーの誕生—彼の椅子（1893-1912）に関する初の詳細な分析的 研究—」小田藍生（ブリュッセル自由大学・早稲田大学）

「ベルギーにおける移民政策の変遷」中條健志（大阪市立大学）

「ベルギーのクルド人、クルド人にとってのベルギー」（仮題）松井真之介

「初期近世におけるネーデルラント芸術家の離散（ディアスポラ）とネットワーク — ヘルドルプ一族の事例 を中心に—」（仮題）河内華子（大阪大学）

[企画・運営・連絡担当] 中條健志

第65回研究会

時期: 2016年5月頃

場所: 関西

第66回研究会

時期: 2016年7月頃

場所: 東京

第67回研究会

時期: 2016年秋頃

場所: 未定

日白修好 150 周年記念シンポジウム

日程: 2016年12月9日-11日

場所: 在日ベルギー大使館、東京理科大学

※詳細は会報P.2をご参照下さい。

- 各会の詳細は決まり次第、研究会メーリング リストでお知らせします。
- 研究会での発表をご希望の場合は、岩本会長、石部副会長または三田副会長宛にご相談下さい。

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese
Association for Belgian Studies

第4号

発行: 2016年2月

編集: 井内千紗

事務局: 神戸大学大学院国際文化学研究所
岩本研究室

ウェブサイト:

<http://www40.atwiki.jp/kbek/>



ベルギー研究会

Japanese vereniging voor de studie van België
Association japonaise d'études belges
Japanische Vereinigung für Belgische Studien